

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18330038

研究課題名（和文） ブリテン帝国とアメリカの経済思想とリーダーシップ
：「帝国デザイン」の検証

研究課題名（英文） British Empire, American Economic Thought and Leadership
：Examination for the 'Design of Empire'

研究代表者

姫野 順一（HIMENO JUNICHI）

長崎大学・環境科学部・教授

研究者番号：00117227

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学 ・ 経済学説・経済思想

キーワード：経済思想・経済思想史

1. 研究計画の概要

ブリテンからアメリカへの歴史的な覇権の移動を見据えつつ、経済思想に焦点をあて、ブリテンの「帝国デザイン」の内容と歴史的特質を明らかにし、アメリカの「帝国デザイン」と比較し、ブリテン帝国からアメリカ帝国に至る覇権移行の経済思想の意義を明確にする。そのためにいわゆる商主義期（旧帝国主義）における「ブリテン」の「国民」経済と貿易ネットワーク経済の統合された「帝国デザイン」、19世紀始めの自由貿易帝国主義期の国民経済と国際自由貿易の統合された「帝国ビジョン」、19世紀末から大戦期にかけての拡大帝国再統合の「帝国デザイン」、帝国維持の費用と効果（財政・租税）の制度設計、国際的な覇権移行の経済思想を解明する。本プロジェクトは経済基盤を拡大させながら国際的な勢力均衡に直面した国（ブリテンとアメリカ）が、「帝国」を維持すべく統治形態と変容させ、国民的な統合を図る場合の経済思想（帝国のデザイン）を研究対象の焦点としている。その場合新たな視点は1、国民経済と帝国の「経済ビジョン」（帝国像：帝国デザイン）における統合、2、「帝国デザイン」における帝国維持の財政設計の焦点化、3、ブリテンにおける「帝国デザイン」の連続性と変容の解明、4、ブリテンからアメリカ（サブ・ブリテン）への覇権移行の焦点化の4点である。

2. 研究の進捗状況

初年度の日本人研究者による打ち合わせ（大阪）で全体の研究計画、研究分担を確認

し、夏深貝・姫野が訪英してイギリス側研究協力者と協議し、12月にはケンブリッジ大学からドントンとピアジーニを招聘した。日本人側の協力者も交えて研究プランを持ち寄り、研究の対象を重商主義期から第2次世界大戦までとし、「帝国デザイン」研究の基軸を「帝国の統合」と「帝国の拡大」に絞ることを確認し、研究分担および研究協力の範囲を確認した。2年度にはアンソニー・ハウらイギリス側協力研究者を招聘し、重商主義期の植民帝国の経済思想（熊谷、ケイン）、アダム・スミスの帝国デザイン（堂目）、アイルランドのナショナリズムを基盤とした経済思想とブリテン帝国との関わり（深貝）、19世紀におけるイギリスの改良思想による国民統合と帝国デザイン（深貝・ハウ）、19世紀末から20世紀初頭における帝国デザインの変容（西沢、姫野、平井、ピアジーニ）、南アメリカにおける帝国マネジメントの受容（ドントン）、アメリカにおける帝国デザインに関わる大恐慌期の立憲主義の経済思想（若田部）の中間成果が報告された。3年度には科研による研究成果を英文の著書として刊行する方向を確認し、イギリス側からピーター・ケイン、ピアジーニを再度招聘し、日本側の上記研究の進展とすり合わせ、帝国の問題群の確認、帝国の歴史研究の最新潮流、帝国と統合にからむ政治経済的な「言語」の問題、'Great Britain'の変容、多様な社会統合といった問題群の解明を検討した。さらに研究集約の方向として、第1部を帝国の領土、植民、社会統合とし、第2部をブリテン帝国の戦略交渉とすることが確認された。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

研究代表の姫野の手術によるイギリス調査の延期と予算の繰り越しや、招聘予定者の日程調整による来日延期など思わぬ事態はあったものの、研究計画は当初の計画通りおおむね順調に進展している。

(1) 重商主義期におけるブリテン帝国の経済思想(ダブナント、ポレックスフェン、デフォー、ポッスルウエイト、タッカー、デッカー)の解明が進んだ(熊谷、ケイン)。

(2) 『道徳感情論』、『国富論』におけるスミスの帝国デザインおよびアイルランドナショナリズムに絡むブリテン帝国のデザインが解明された(堂目、深貝、ハウ)。

(3) グラッド・ストーンに起源をもつ自由哲学に立脚する改革思想と帝国管理の経済思想(チェンバレン、マーシャル、ニコルソン、ホブスン)が解明された。(西沢、姫野、ピアジーニ)

(4) ケインズおよびアメリカの大恐慌期のナショナリズムと帝国デザインが解明された(平井、若田部)。

4. 今後の研究の推進方策

今後は研究がまだ手薄なコブデンの自由貿易帝国構想(ハウ)、立ち遅れている植民地側の帝国管理(インド:秋田、東南アジア:杉原、南アフリカ:ドントン)などの研究を促しながら、科研の最終年次として「ブリテン帝国のデザイン」に関する集約の研究会(2009年秋)を実施し、この成果を英文の著書で出版するための調整を行う。また若田部を中心にブリテン帝国からアメリカへのリーダーシップ移行に関わる研究会を実施し、次の研究を準備する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

- ① 若田部昌澄、経済危機の処方箋を大恐慌、大インフレ、大停滞から学ぶ、『エコノミスト臨時増刊 世界景気最前線』、10月13日号、96-105、2008年査読無
- ② 熊谷次郎、イギリス重商主義帝国形成期の経済思想——キャラコ論争における植民地市場の意義——、桃山学院大学経済経営論集、49巻1号、33-71、2008年、査読無
- ③ 深貝保則・高島和哉・川名雄一郎、小畑俊太郎、板井広明、「ジェレミー・ベンサム：その知的世界への再アプローチ——フィリップ・スコフィールド『功利とデモクラシー』(2006年)をめぐって——」、『エコノミア』(横浜国立大学)、第58巻第2号、25-57、2007年、査読無
- ④ 深貝保則、帝国と文明のブリテン思想史

をめぐる「用語」分析の可能性、横浜国立大学経済学部 Discussion Paper、07-J-1、1-34、2006年、査読無

- ⑤ Wakatabe, Masazumi (With Yong J.Yoon) Adam Smith, Buchanan and Classical Liberalism: An Interview with James M.Buchanan, 『経済学史研究』、第48巻第1号、124-138、2006年、査読有

[学会発表](計5件)

- ① Wakatabe, Masazumi, The Kyoto University Economic Review (1926-1944) as Importer and Exporter of Economic Ideas, The Second ESHET-JSHET Joint Conference, 一橋大学, 2009年3月21日
 - ② Junichi Himeno, The New Design of the British Empire in Early Twenty Century, *The Workshop on the Empire, Integration and Economic Thought: British Empire and Economic Languages* and mark Tower 1809, Yokohama National University March 28-29, 2009
 - ③ Yasunori, Fukagai, National Economy, Peasant and the Land Tenure: Economic Thought of Ireland and British Empire, 1780s-1840s, UK History of Economic Thought Conference, University of Edinburgh, September, 3-5, 2008
 - ④ Junichi Himeno, Rethinking on the British New Liberalism and Social Welfare, The Workshop on the Economic Thought, Yokohama, February 16, 2007
 - ⑤ 姫野順一、1920年代イギリスにおける改革思想の三類型、社会思想史学会(法政大学、2006年10月26日)
- [図書](計4件)
- ① 堂目卓生(単著)、『アダム・スミス『道徳感情論』と『国富論』の世界』、中央公論新社、2008年、pp. 297 ページ
 - ② 若田部昌澄(部分執筆)「経済政策における知識の役割—思想・政策・成果—」野口旭編『経済政策形成の研究—既得観念と経済学の相克』、ナカニシヤ出版、2007年、pp.32
 - ③ 堂目卓生(部分執筆)『経済学名著と現代』、日本経済新聞出版社、2007年、pp.23
 - ④ 熊谷次郎(部分執筆)、「田口卯吉—社会の大理と経済学—」『日本の経済思想 I』、日本経済評論社、2006年、xii+pp.299